

ドイツ病理学会派遣報告書

広島大学大学院医系科学研究科 口腔顎顔面病理病態学

安藤俊範

この度、ドイツのアウグスブルク市にて開催されました **109th Annual Meeting of the German Society of Pathology**（5月28-30日）に、シニア研究者として北海道大学の田中伸哉先生、ジュニア研究者として東京大学の深川彰彦先生と共に派遣していただき、参加および口演発表を行ってまいりました。

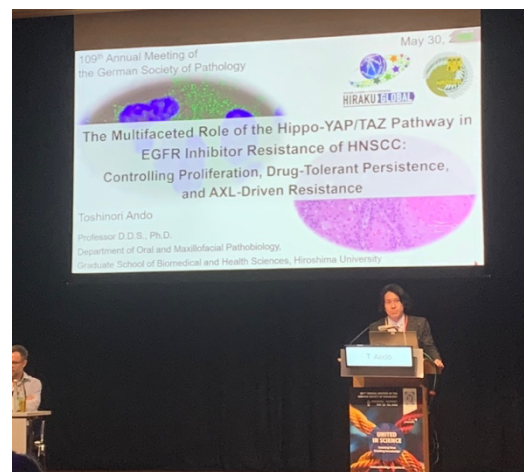
会場は **Kongress am Park** と呼ばれる歴史的な会議・コンサート施設で、すぐ後ろには「トウモロコシ」の愛称で親しまれる高層ホテル **Dorint An der Kongresshalle** が隣接していました。アウグスブルクは、紀元前に築かれたドイツで最古の都市の一つであり、中世からルネサンス期にかけて金融・交易の中心地として繁栄した歴史を持ちます。深川先生と共に街並みを散策し、ロマネスク様式とゴシック様式が混在する荘厳なアウグスブルク大聖堂や、**1620**年に完成した美しいルネサンス建築であるアウグスブルク市庁舎などを見て回り、現地の深い歴史に触れることができました。

学会の各セッションでは活発な議論が行われており、私自身の研究分野でもある、がんの最新研究を拝聴し、大変刺激を受けました。また私自身が口腔病理を専門としておりますので、唾液腺や口腔粘膜疾患の診断に関するセッションも聴講する機会に恵まれ、とても勉強になりました。最終日のセッションにて、私は **“The Multifaceted Role of the Hippo-YAP/TAZ Pathway in EGFR Inhibitor Resistance of HNSCC: Controlling Proliferation, Drug-Tolerant Persistence, and AXL-Driven Resistance”** というタイトルで、これまでに行ってきたがんの **Hippo-YAP/TAZ** シグナル経路に関する研究について発表いたしました。これまで国際学会で発表する機会は限られておりましたが、今回はフロアから幾つかのご質問をいただき、有意義なディスカッションを経験することができました。また、田中先生、深川先生のハイレベルな研究内容を拝聴させていただき、深く感銘を受けるとともに、日本のトップレベルの病理学研究を発表される姿を大変誇りに感じました。私自身も、今後さらに研究に励んで国際学会での発表を重ね、日本の病理学研究のプレゼンスの向上に貢献してまいりたいと思います。

末筆になりますが、このような貴重な経験を賜りました日本病理学会国際交流委員会委員長の都築豊徳先生、ならびに病理学会事務局の皆様方に深謝申し上げます。



左：アウグスブルク市庁舎 右：アウグスブルク大聖堂



左：学会会場の入り口で後ろには”corncob”の愛称で知られる高層ホテルが見えます。右：最終日のシンポジウムにて筆者が口演させていただきました。